

# 生徒が所属する学級内の人間関係がいじめの疑いと学級適応感に与える影響

Influence of Relationships within Classes which Students Belong to on “Ijime” and Feeling of Adaption to their Class

中村 豊<sup>1a)</sup> 日野 陽平<sup>b)</sup>  
Nakamura Yutaka Hino Yohei

**要旨:** 本論文では、生徒の人間関係と担任教員に関する生徒の認識に着目し、コロナ禍前に実施された「中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」に基づいて、いじめ被害及び学級適応感に影響を与える要因を探索的に分析した。その結果、男女ともに、同性の友人の人数がいじめ被害および学級適応感に影響を及ぼすことが示され、同性の友人の存在がいじめ被害の防止や学級適応感向上に資する可能性が示唆された。また、担任教員が自らをよく理解してくれているという認識や担任教員と良好な関係を築けているという認識を持っている生徒は、比較的いじめ被害に遭っておらず学級適応感も低くないという傾向がみられた。これらのことから、生徒間の良好な人間関係形成や、多面的・多角的で深い生徒理解、生徒—教員間の良好な関係形成等に資する、丁寧な生徒指導（発達支持的生徒指導・課題予防的生徒指導）の重要性が確認できた。

**キーワード:** いじめ、重大事態、生徒指導

## 1 問題と目的

現在の学校において、いじめ問題は喫緊の課題となっており、いじめの積極的認知から次のステージに移行することが必要である。筆者らは、これまでに、いじめ重大事態の発生件数が漸増状況にあることに着目し、小学校・中学校・高等学校いずれの校種においてもいじめ重大事態発生件数が増加している<sup>2</sup>ことから、いじめが重大事態化することの防止が当面の課題であるという問題意識に基づいた次のような研究に取り組んできた。

中村・日野（2024）は、個人要因のみならず学級の荒れや同調圧力といった環境要因がいじめ被害に相対的に大きな影響を及ぼすことをエビデンスベースドで明らかにしている。この理由として、同調圧力が強い集団においては異質性排除の傾向が強まること（井口・河村, 2021）、および荒れている学級においてはいじめを許容する雰囲気生まれやすいことが考えられる。いじめを予防するためには、個人要因のみならず、生徒が所属する学級環境・学校環境（環境要因）に積極的にアプローチする必要があるといえる。

また、日野・中村（2024）は、いじめ重大事態に係る調査報告書の分析<sup>3</sup>を行い、重大事態につながる

<sup>1a)</sup> 東京理科大学教育支援機構教職教育センター <sup>b)</sup> 大阪大学大学院（院生）

<sup>2</sup> いじめ防止対策推進法施行後10年目となる令和4年度のいじめ重大事態発生件数は923件と看過できない状況にある。

<sup>3</sup> いじめ防止対策推進法施行以降に作成・公表されたいじめ重大事態に係る115本の調査報告書を分析した。

いじめ発生の場といじめの態様を検討するとともに、調査報告書の「提言」に示された教育活動を検討した。その結果、次のような知見が得られた。

第1に、部活動におけるいじめが重大事態につながるケースが多いことが明らかになった。先輩―後輩の上下関係による権力格差が存在する場合があること（武田，2009）や、顧問の教員が部活動にあまり顔を出せず生徒の監督ができなかったり関係性の変化に気づかなかったりする場合があること、閉鎖的な関係性の中で生徒間の同調圧力が強まる傾向があること、勝敗や成績の責任を問われる場合があること（橋本，2018）などが、部活動におけるいじめの背景要因となっていると思われる。日野・林・佐野（2020）は、小学校・中学校・高等学校の教員に対する質問紙調査に基づいて、部活動におけるいじめの予防・早期発見のために現場の教員が必要とする支援を整理している。文部科学省・教育委員会等から現場が必要とする様々な支援が提供されることによって、部活動におけるいじめの予防・早期発見に向けた取り組みが充実することが期待される。長谷川（2013）が「部活動の負の側面に焦点をあてた実証研究の蓄積が求められるのではないだろうか」と指摘しているように、部活動におけるいじめの効果的な対策に関する研究を蓄積させていくことが喫緊の課題であるといえる。

第2に、ネット（SNS）いじめが重大事態となる事例も多くみられた。いじめ重大事態調査報告書の分析ではLINEにおけるいじめが多くみられ、ネット（SNS）いじめは教員の目が行き届きにくい（三島・本庄，2015）という背景もあるために、いじめが深刻化すると考えられる。日野・林・佐野（2020）は、LINEにおけるいじめの予防・早期発見のために現場が必要とする支援を整理し、学校を取り巻く関係機関は、学校が必要とする様々な支援を提供することが必要と指摘している。

第3に、体育祭や文化祭などの学校行事においても重大事態となるいじめが発生しうることが明らかになった。田中（2009）は、「特に班編成で競争したり行動したりすることが多い学級集団、文化祭などの行事で結束する学級集団では、集団・クラスとしてのまとまりやアイデンティティを確立していく過程で、差異のあるものを排除しようとする傾向が強い（田中，2009, p.56）」ことを指摘するとともに、中学3年次の文化祭で起きたいじめの事例を分析している。日野（2024）は、小学校段階においてグループ編成に配慮すること、中学校や高等学校段階においても生徒任せにせず教員が丁寧に見守り適宜積極的な介入を行うこと、UD（ユニバーサルデザイン）の視点に基づいた学校行事へと変化させていくこと、活動に際して個々の児童生徒の意思を尊重すること等が、いじめの防止に資する可能性を示している。

第4に、教員の目が届きにくい時間（休み時間や放課後等）や場所（校庭やトイレ、寮など）におけるいじめが重大事態につながっている事例も多くみられた。日野・林・佐野（2019）は、休み時間や清掃の時間等の授業以外の時間においても教員が児童生徒とともに過ごすことにより、児童生徒が「そのような時間帯でもいじめをしたら教員に見つかるだろう」という予測を持つようになることが、いじめ予防に資する可能性を指摘している。教員の目が届きにくい時間や場所にも、教員の目が行き届くようにする工夫が重要となるだろう。

第5に、重大事態におけるいじめの態様については、仲間外しが多いことが明らかになった。加藤・太田・舒（2019）は、いじめのタイプと被害生徒の抑うつ度との関連を分析し、関係性攻撃がみられるいじめについては、介入の緊急性が高い被害とみなして積極的に介入する必要があることを指摘している。仲間外しも関係性攻撃の一種であり、重大事態につながるケースが比較的多いいじめの態様といえることから、積極的介入が必要である。

第6に、からかいといった一見軽微に思えるいじめの態様も、重大事態を引き起こすことが明らかになった。単なる児童生徒間のトラブルとして処理することなく、からかい等のいじめについても早期発見・早期対応が必要といえる。

第7に、「提言」における再発防止に資する教育活動として最も多くみられたのは、いじめ防止プログラム、次いで自殺予防教育であった。多くの報告書で提言されているように、いじめ防止プログラムや自殺予防教育を教育課程に組み込み体系的に実施していくことが、いじめ重大事態の防止においても必要不

可欠であるといえる。一方、集団活動を特質としている特別活動に関する記述は比較的少ないことが明らかになった。

このような先行研究や予備研究を踏まえ、本論文では、コロナ禍前に第1筆者らにより実施された「中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」(中村, 2019)の未分析のデータについて、生徒のいじめ被害および学級適応感に影響を与える要因を探索的に分析する。まず、生徒の人間関係に着目し、いじめ被害および学級適応感に与える影響を検討する。また、担任教員に関する生徒の認識にも着目し、いじめ被害および学級適応感に与える影響を探索的に検討する。これらの分析を通して、いじめの積極的認知の次のステージである、いじめを重大事態化させないための知見を見出すことを目指す。

## 2 方法

本調査は、阪神地区3市の公立中学校(16校)の生徒を対象としている。調査に先立ち、2019年11月に調査対象校の校長宛に依頼状、質問票(生徒用)、実施要項、回収用封筒、送付用段ボール箱等を同封し宅配便により送付した。その後、実施要項に基づき、教室での集合調査法により質問票による調査が実施された。実施後に封入回収された質問票を回収し、入力作業が行われ、ローデータが作成された。なお、本研究では、統計ソフト IBM SPSS Statistics ver.24 を使用して分析を行った。

質問票では、最初に調査の目的を示し、回答は統計的に処理するため誰が何を答えたか他の人に知られることはないこと、答えにくい設問には無理に回答する必要はないこと、テストではないので、ありのまま、思うままを答えてよいことを教示文の中で明記し、情報の取り扱いに関する守秘義務等について人権保護の観点から丁寧な説明を心がけた。

## 3 結果

### (1) 基礎統計量

調査協力校である16校の中学校から回収された質問票数を表1に示した。本論文では、質問票の項目に回答のある男性4316人、女性4219人、無回答52人、合計8587人の回答を分析対象とした。

表1 調査対象者の属性と学年

	男性	女性	無回答	合計 (人)
1年生	1525	1455	17	2997
2年生	1277	1273	19	2569
3年生	1514	1491	16	3021
合計 (人)	4316	4219	52	8587

なお、調査協力校の生徒数の詳細については把握できていないため、回収率については不明である。しかし、教室において集団調査法で実施されたため、調査当日に出席していた生徒の大多数は調査票に回答したものと推察できる。

### (2) 人間関係といじめ被害および学級適応感との関連

まず男子生徒の回答を抽出し、「同じクラスの男子の友だち」「同じクラスの女子の友だち」「親しく話すことができる学校の先生」「悩みごとを相談できる学校の先生」がどれくらいいるか(まったくいない、

1～3人、4～6人、7～9人、10～12人、13人以上の6件法で回答を求めた)を独立変数、「クラスメイトに馬鹿にされていると感じることがある」(とてもあてはまる、まああてはまる、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない、の4件法で回答を求めた)といういじめ被害を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、表2のような結果が得られた( $R^2=0.024$ )。

表2 人間関係といじめ被害との関連(男子)

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
男子の友だち	0.101	0.012	0.154	8.122	0.000
女子の友だち	0.001	0.011	0.002	0.099	0.921
親しく話せる先生	-0.057	0.019	-0.069	-3.040	0.002
相談できる先生	0.044	0.019	0.052	2.390	0.017

次に、女子生徒の回答を抽出し、同じく重回帰分析を行ったところ、表3のような結果が得られた( $R^2=0.029$ )。

表3 人間関係といじめ被害との関連(女子)

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
男子の友だち	-0.023	0.011	-0.044	-2.126	0.034
女子の友だち	0.097	0.012	0.162	7.930	0.000
親しく話せる先生	-0.025	0.020	-0.026	-1.234	0.217
相談できる先生	0.104	0.023	0.092	4.458	0.000

続いて、男子生徒の回答を抽出し、「同じクラスの男子の友だち」「同じクラスの女子の友だち」「親しく話すことができる学校の先生」「悩みごとを相談できる学校の先生」の人数を独立変数、「クラスに溶け込めていないと感じることがある」(とてもあてはまる、まああてはまる、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない、の4件法で回答を求めた)という学級適応感を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、表4のような結果が得られた( $R^2=0.090$ )。

表 4 人間関係と学級適応感との関連（男子）

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
男子の友だち	0.172	0.011	0.276	15.198	0.000
女子の友だち	0.016	0.010	0.029	1.519	0.129
親しく話せる先生	0.007	0.017	0.009	0.417	0.677
相談できる先生	0.013	0.017	0.016	0.740	0.459

次に、女子生徒の回答を抽出し、同じく重回帰分析を行ったところ、表 5 のような結果が得られた ( $R^2=0.161$ )。

表 5 人間関係と学級適応感との関連（女子）

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
男子の友だち	0.023	0.010	0.043	2.250	0.024
女子の友だち	0.208	0.011	0.342	18.106	0.000
親しく話せる先生	0.051	0.019	0.053	2.666	0.008
相談できる先生	0.033	0.022	0.029	1.511	0.131

これらの結果から、男女ともに、同性の友人の人数がいじめ被害および学級適応感に与える影響力が他の変数より相対的に大きいことが示された。同性の友人の存在がいじめ被害を防止し、学級適応感の低下を防ぎうることを示唆されたといえる。

### (3) 担任教員に関する認識といじめ被害・学級適応感との関連

担任教員に関する認識について、「あなたのクラスの担任の先生には、次のことがどれくらい当てはまりますか」という設問を設け、「担任の先生は頼りになる存在だ（項目①）」「担任の先生は困っているときに助けてくれる（項目②）」「担任の先生は自分のことをよく理解してくれている（項目③）」「担任の先生はクラスの一人ひとりによく話しかけている（項目④）」「担任の先生は誰のことも絶対にひいきしない（項目⑤）」「クラスのことは、担任の先生が最終的に何でも決める（項目⑥）」「自分は担任の先生と話す機会が多い（項目⑦）」「自分は担任の先生と仲が良い（項目⑧）」の 8 項目について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。そのうえで、いじめ被害（「クラスメイトに馬鹿にされていると感じることがある」）を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、表 6 のような結果が得られた ( $R^2=0.018$ )。



表 6 担任教員に関する認識といじめ被害との関連

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
項目①	0.026	0.023	0.024	1.153	0.249
項目②	-0.040	0.024	-0.035	-1.682	0.093
項目③	-0.078	0.020	-0.074	-3.930	0.000
項目④	-0.032	0.015	-0.031	-2.089	0.037
項目⑤	-0.045	0.016	-0.042	-2.873	0.004
項目⑥	0.021	0.013	0.018	1.603	0.109
項目⑦	0.116	0.017	0.114	6.826	0.000
項目⑧	-0.042	0.019	-0.040	-2.189	0.029

上記の結果から、項目③、項目⑤、項目⑧のいじめ被害の抑止に資する影響力が相対的に大きいことが示された。丁寧な生徒理解やひいきをしないこと、生徒と良好な関係を築くことの重要性が示唆された。

次に、同様の項目を用いて、学級適応感（「クラスに溶け込めていないと感ずることがある」）を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、表 7 のような結果が得られた ( $R^2=0.033$ )。

表 7 担任教員に関する認識と学級適応感との関連

	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
項目①	0.088	0.022	0.080	3.995	0.000
項目②	-0.029	0.023	-0.026	-1.255	0.209
項目③	-0.089	0.019	-0.086	-4.629	0.000
項目④	-0.029	0.015	-0.029	-1.948	0.051
項目⑤	0.000	0.015	0.000	-0.013	0.990
項目⑥	0.089	0.013	0.078	7.069	0.000
項目⑦	-0.042	0.017	-0.042	-2.557	0.011
項目⑧	-0.089	0.019	-0.085	-4.795	0.000

上記の結果から、項目③および項目⑧の学級適応感の醸成に資する影響力が相対的に大きいことが示された。ここでも、丁寧な生徒理解と生徒と良好な関係を築くことの重要性が示唆された。

## 4 考察

本研究では、人間関係といじめ被害および学級適応感との関連を取り上げ、それらの要因がいじめ被害に及ぼす影響力の大きさを、重回帰分析を通して明らかにすることを試みた。

なお、分析の対象については、男子生徒と女子生徒に分けている。中学校段階の生徒は、思春期の真っ只中にあり、疾風怒涛と例えられるように心理的に不安定な傾向がみられる。そして、男子生徒・女子生徒は異性を強く意識するようになる一方、同性間の結びつきが強まる様子がみられる。このような中学生期の生徒の特性<sup>4</sup>を踏まえ、男女それぞれについて分析を行った。

<sup>4</sup> Kenneth H. Rubin, William M. Bukowski, & Julie C. Bowker (安藤明人 訳) (2022). 仲間集団における子ども. 児童心理学・発達科学ハンドブック 第4巻 生態学的情況と過程 第5章 (pp. 262-332) 福村出版

その結果、男女ともに同性の友人の人数がいじめ被害および学級適応感に影響を及ぼす可能性が示された。このことから、同性の友人の存在がいじめ被害を防止し、学級適応感の低下を防ぎうることが示唆された。

水野・加藤・太田（2017）は小学5・6年生を対象に調査を行い、学級内に所属するグループがない児童は、学級内のグループに所属している児童に比べて、いじめ被害を受けやすいことを明らかにしている。この先行研究の知見と本研究の結果から、同性の友人がおらず所属するグループがない児童生徒へのサポートを充実させるとともに、友人を作るための機会を適切な形で設定することが、いじめ被害の防止に資する可能性があるといえる。

学級内の人間関係は、意図的な集団活動（係・当番活動、学校行事への取り組み、学級活動・ホームルーム活動等）や、教科等の学習活動を柱とする日常的な積み重ねにより形成されるものである。それゆえに、学級・ホームルーム担任は一人一人の生徒理解並びに集団の特性や質についても深く理解して、丁寧な生徒指導（発達支持的生徒指導・課題予防的生徒指導）を行うことが求められる。

また、担任教員に関する生徒の認識といじめ被害および学級適応感との関連についての分析から、生徒一人一人をよく理解をすること・生徒と良好な関係を築くことがいじめ被害を防止し学級適応感の低下を防ぐ可能性が示唆された。このことは、多面的・多角的なアセスメントを通して丁寧に生徒理解をしていくことや、生徒一人一人のニーズを汲み取り寄り添いながら対話を積み重ねて良好な関係を築いていくことの重要性を示唆しているといえる。

今後の課題は、いじめを重大事態化させない集団づくりに必要な実効性のある教育活動について実証的な実践研究に取り組むことである。

**付記：**本研究成果は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 18K025485）において実施された質問票による調査結果の未分析部分である。本論文の執筆は、第2筆者が第3章及び第4章を担当し、第1章・第2章は第1筆者と第2筆者が協働して完成させたものである。

## 引用・参考文献

- 長谷川祐介（2013）. 高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み—指導者の暴力、部員同士の暴力・いじめに着目して—. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 35, 153-163.
- 橋本定男（2018）. 児童・生徒の自主的態度を育むクラブ活動・部活動 赤坂雅裕・佐藤光友（編）やさしく学ぶ特別活動（pp. 119-134）ミネルヴァ書房
- 日野陽平・林尚示・佐野秀樹（2019）. いじめの心理学的・社会学的要因と予防方法—先行研究のレビューと政策・実践・研究への提言—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 70, 131-158.
- 日野陽平・林尚示・佐野秀樹（2020）. LINEにおけるネットいじめと部活動におけるいじめの予防・早期発見に向けて教員が必要とする支援—小学校・中学校・高等学校への質問紙調査から—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 71, 451-467.
- 日野陽平・中村豊（2024）. いじめが重大事態化する事案の防止に資する特別活動の役割及び機能の検証—いじめ防止対策推進法第28条に係る調査報告書の提言に着目して—. 日本特別活動学会第33回大会研究発表要旨集録, 52.
- 日野陽平（2024）. 学校行事において発生しうるいじめとその予防方法に関する一考察. 日本教育学会大会研究発表要項
- 井口武俊・河村茂雄（2021）. 学級における同調圧力がもたらす否定的側面とその改善を検討した先行研究の展望. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊, 28(2), 173-181.
- 加藤弘通・太田正義・舒悦（2019）. いじめ類型と深刻化の関係. 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 192.

- 
- 三島浩路・本庄勝（2015）. 技術的観点からのネットいじめ対策. 電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン, 9, 102-109.
- 水野君平・加藤弘通・太田正義（2017）. 小学生のスクールカースト、グループの所属、教師接触といじめ被害の関連. 心理科学, 38 (1), 63-73.
- 中村豊（2019）. 中村豊研究代表（平成 30 ～令和 3 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））報告書『特別活動と積極的な生徒指導－社会の形成者としての資質を涵養する特別活動－』（課題番号：18K025485）
- 中村豊・日野陽平（2024）. 児童生徒いじめの重大事態化を防止する効果的実践モデルの開発に関する基礎研究. 東京理科大学教職教育研究, 9, 13-22.
- 武田さち子（2009）. 子どもとまなぶいじめ・暴力克服プログラム－想像力・共感力・コミュニケーション力を育てるワークー 合同出版
- 田中美子（2009）. いじめ発生及び深刻化のシステム論的考察. 千葉商大論叢, 47 (1), 31-63.